第四章　漢　字

■漢字の起原

漢字の最も古いものは“契文(けいぶん)”もしくは“甲骨文”と呼ばれてゐるものである。この“文”といふ字は、“文字”といふ意味の最も古い用ひ方の文字である。つまり、昔は、“文字”のことを単に“文”と言ったのである。だから、今では、“甲骨文”よりも、“甲骨文字”と呼ばれることの方が多い。

一八九九年、中国の河南省安陽県小屯村から、文字の刻みつけられた亀の甲や牛の骨などが沢山発見された。亀の“甲”や牛“骨”に刻まれた文字といふことで、この文字を“甲骨文”と言ふのである。

また、“契文”と呼ばれる訳は、“契”とは「刀で刻みつける」といふ意味を表した文字であって、「亀の甲や獣の骨に刻みつけた文字」といふ意味で名付けられたものである。これらの文字は、国の大事を決定する際に、その吉凶を占ふため、亀の甲や牛の骨に占ひの文章として刻み付けられたものであった。

亀の甲や獣の骨のほかに、この時代の青銅器や石器にも、文字が刻み付けられてゐる。青銅器に刻み付けられた文字を“金文”と言ひ、石器や石碑に刻み付けられた文字を“石文”と言ひ、これを総称して“金石文”と呼んでゐる。

『大学』といふ書物に依ると、殷の湯王（たうわう）が毎日使ってゐた盥（たらい）には、「苟日新、日日新、又日新（まことに日に新たに、日日に新たに、また日に新たなれ）」といふ自戒の“銘”が刻まれてあったといふことである。

さて、甲骨文が刻まれてゐる亀の甲や牛の骨が発見された所は、紀元前一三〇〇年からおよそ三百年にわたり、殷王朝の都が在った所であったから、漢字の起原は、今から少なくとも千三百年の昔であった、と考へられてゐる。

「文字の発明」は、すでに前章で述べたやうに、紀元前三三〇〇年頃に、スメール人によって発明されてゐる。また、スメール文字に触発されて作られたと考へられてゐるインダス文字も、少なくとも紀元前二〇〇〇年以上の昔に発明されたものと考へられてゐる。

これらの事を考へ合せてみると、漢字の発明は、スメール文字、もしくはインダス文字がシルクロードを経て中国に入り、それに触発されて作られた、と考へるのがどうも至当のやうに思はれる。

■象形文字

“甲骨文”や“金石文”は、たいてい、絵に近い形の線や点で書かれてゐる。それで、「形を象(かたど)った文字」といふ意味で、このやうな文字を“象形文字”と呼ぶのである。

はっきりとした形のある物は、たいてい、この“象形”といふ方法で“文字”に表現することが出来る。虎や豹などでも、甲骨文では、一目でそれと判るやうに、見事に特徴をとらへて表現されてゐる。

これらの象形文字に属する漢字は、スメール文字やエヂプトの聖刻文字、インダスの絵画文字にとてもよく似てゐる。それで、最初に作られたスメール文字をそのままそっくり真似たものであるといふ意見があるわけであるが、然し、「物の形を象った結果、同じやうな文字になった」と考へる方が自然であらう。

さて、「昔は文字のことを単に“文”と言った」と述べたが、“文”といふ文字は、点と線とを交錯させた形を表した文字であって、本来は“模様”といふ意味を表した文字であった。“縄文式土器”の“縄文”は“縄模様”の意味であって、これが“文”の本義だったのである。

ところが、“文字”も、やはり「点と線とを交錯させて作ったもの」であって、一種の模様と見ることが出来るので、それで“文字”のことを“文”と呼ぶやうにたったものである。

■指事文字

およそ、言葉といふものを大別すると、“物”と“事”との二つに分けることが出来る。“物”とは、形を備へた具象物のことであり、目で見ることが出来、手にとらへることも出

来るものである。これに対して、“事”とは、形を備へてゐない“抽象的な事柄”のことである。

“物”を表した文字が“象形文字”であって、“事”を表した文字を“指事文字”と言ふ。抽象的な“事”を指し示した文字といふ意味の言葉である。だから、「形を象(かたど)った文字」であっても、その文字が「事を表した文字」であれば、それは“象形文字”ではなくて“指事文字”だとしなければならない。

“一・二・三”や“上・下”などの文字が“指事文字”であることには誰も異論が無いところであるが、“大”や“立”などの文字は、人が両手を広げて立ってゐる形を象ったものであるから、ほとんどの辞典が、これを“象形文字”としてゐる。然しながら、“大”といふ字は「大きいといふ事」を、“立”といふ字は「立つといふ事」を表した文字であるから、どちらも“指事文字”としなければならないと思ふ。

“一・二・三”といふ文字も、具象物である棒を、一本二本三本それぞれに象ったものであると考へられないことはない。もしも、「物を象った文字はすべて象形文字である」とするならば、“一・二・三”といふ文字も象形文字だとすることが出来ることになる。

だから、「物の形を象った文字」であっても、その文字が「抽象的な“事”を表した文字」であるならば、“指事文字”としなければいけないと思ふものである。形を象った文字だからと言って、これをすべて“象形文字”としてゐる従来の考へ方は改められるべきであらう。

■会意文字

理論的に言へば、「目に見ることの出来る“物”は“象形文字”で、「目に見ることの出来

ない“事”は“指事文字”で表すなら、すべての言葉がこれで文字にすることが出来る理窟であるが、実際にはなかなかさうは行かない。

然し、象形文字や指事文字をうまく組合せると、それまでどうしても表すことの出来なかった言葉でもうまく表すことが出来る、といふことがやがて発見されたのである。

例へば、“休む”といふ意味の言葉でも、これを一字で表さうとするとなかなかうまく行かないけれども、“人”と“木”と組合せて“休”といふ字を作ると、「人は“休む”時に木のそばを選ぶ」といふ連想から、“やすむ”といふ意味を表す文字を作ることが出来ることを発見したのである。

このやうな造字法を「意味と意味とを組合(会合)せた文字」といふ意味で“会意文字”と言ふ。会意文字に属する文字には、“林”や“森”や“从(従の本字)”や“㒸(衆の本字)”や“炎”のやうに同じ字を組合せたものもある。

“文字”の“字”も“会意文字”である。“宀”は、古い形は“㐭”で、家の形を象ってゐて“いへ”といふ意味を表した部首(漢字の部品のこと)である。これに“子”といふ字を組合せて作った会意文字が“字”である。この“字”は、「家に子供が生れる」といふ意味から「家族がふえる」といふ意味を表した文字であった。

ところが、象形文字や指事文字を組合せると、新しい文字がどんどん作ることが出来、文字がふえて行ったので、それまで、象形文字や指事文字のことを“文”と呼んでゐたのに対して、会意によって作られたものを“字”と呼んだものである。

これは、また次のやうに考へることも出来る。二つの文字の合体によって新しい字が作られることは、男女の合体によって新しい生命が誕生するのによく似てゐる。それで、新しい生命が“子”であるのにちなんで“字”と名付けたものである、と。

だから、象形文字と指事文字とは“文”と呼ばれる“親文字”であり、会意文字は“字”と呼ばれる“子文字”である、と言ふことが出来る。

■形声文字

漢字の造字法には、もう一つ、“形声文字”と呼ばれるものがある。漢字の造字法は、象形・指事・会意にこの形声を加へて四つあるのであるが、漢字はこの形声といふ造字法によってその数が著しくふえたのであって、漢字のおよそ九〇パーセントは形声文字なのである。

正に、形声文字が生れるまでの漢字は“文”であって、この“形声”といふ造学法が考へ出されたために漢字がどんどんと作られ、ふえて“字”と呼ばれるやうになったのである。

形声文字とは、「“形”と“声”との二つの部首の組合せに成る文字」といふ意味の言葉である。“形”とは“意味”のことを指して居り、“声”とは“発音”のことを言ったものである。会意文字が「意味と意味との組合せによって成る文字」であるのに対して、形声文字は「意味と発音との組合せによって成る文字」なのである。

例へば、“漢字”の“漢”が形声文字である。“氵”は、古い字形では“氵”となってゐて、“水”といふ字の古い形と全く同じ形であったが、右の部分が省略されて今の形になったものである。この部首は、“水”を意味してゐて三つの点画から成ってゐるので“三水”と呼ばれる。

従って、“漢”といふ字は「漢　水（かんすい）（漢といふ川）」といふ言葉を一字に表現した文字であって、今の“漢水”といふ川のことを表した字である。

“漢”の場合は、“氵”が意味を表し、“　”が発音を表してゐるが、このやうに“扁”が意味を表し、“旁”が発音を表すといふのが“形声文字”の典型的なタイプである。

然し、“艱”といふ字のやうに、“　”が扁になってゐて、発音と意味とを表し、旁の“艮”が意味を表すやうな文字もある。この場合は、“会意”でもあり、“形声”でもあるから、“会意形声字”といふ言ひ方をすることもある。“形声文字”には、単なる“形声”よりも“会意形声”の文字の方が多い。

さて、それでは“川の名前”である“漢”が、なぜ、“漢字”といふ言葉に使はれてゐるのか、不思議に思はれる方が多いと思ふので、その由来を述べたいと思ふ。

御承知と思ふが、中国には揚子江といふ大河が西から東に向って流れてゐる。昔は、単に“江”、または“長江”と呼ばれてゐた。

“江”は“工水”といふ意味の言葉を一字にした文字であることは、“漢”の場合と全く同じである。

この揚子江の支流で、その北の方をほゞ平行して流れてゐるのが“漢水”である。この漢水が揚子江と合流する“口”に在る都市が“漢口”であり、その上流には“漢中”といふ都市がある。

昔、強暴な“秦”といふ帝国を滅し、これに代って天下を統一した“漢帝国(西紀前二〇二年に建国し、二百十年を経て、紀元八年に滅亡した)”を打ち建てた“劉邦”は、この漢中を中心とする漢水の流域一帯を支配する“漢中王”から身を起した。それで、これに因んで、国名を“漢”としたのである。

漢水が合流するのは黄河である。この点を除けば、他はすべて正しい。尚、古くは“か”と呼ばれ、河の文字が充てられていたが、川の色が黄色いことから黄河と呼ばれるようになった。

秦の始皇帝は初めて古代中国を統一したので、それまで地方地方によってまちまちだった文字の字体を、“篆書(てんしょ)”と呼ばれる書体に統一した。この字体は、今、実印の字体として用ひられてゐるものである。

これに対して、漢王朝では、篆書よりも現在の“楷書”に近い字体である“隷書(れいしょ)”といふ字体を作った。漢帝国は紀元八年に“新”の王莽によって滅亡するが、劉秀によって漢帝国は洛陽に再建される(紀元二五年)。儒学も盛んになり、紙の発明などもあって、現代の書体である“楷書”がこの時代に作られ、以後これが漢字の字体の基準になった。それで、これ以後の中国の文字はすべて“漢字”と呼ばれるわけである。

■漢字の造字法

すでに述べたやうに、漢字の造字法には、“象形”“指事”“会意”“形声”の四つがある。そのうち、“象形”と“指事”とは、最も古く、かつ基本的な造字法であって、これによって作られた文字は単に“文”と呼ばれてゐた。

ところが、これらの文字を二つ以上組合せることにより、それまでうまく作れなかった言葉もどんどん作れるやうになり、漢字が著しくふえた。この造字法が“会意”と“形声”であり、これによって作られた文字は“字”と呼ばれ、これらを総称して“文字”といふことはすでに述べた所であるが、これを整理すると次の表のやうになる。

- 文字
  - 文（親）
    - 象形文字……具体的な“物”を表す
    - 指事文字……抽象的な“事”を表す
  - 字（子）
    - 会意文字……意味と意味との組合せ
    - 形声文字……意味と発音との組合せ

漢字は、どんな漢字でも、必ずこの四つの造字法のうちのどれかで作られてゐる。然しながら、昔から、漢字の成り立ちと言へば、必ず“六書（りくしょ）”といふ言葉が出る。それは、右の四つの造字法に、“転注（てんちゅう）”と“仮借”とを加へたものの名称である。

然し、“転注”と“仮借”とは漢字の造字法の名称ではなくて、“用字法”の名称である。つまり、ある漢字が、本来の意味に使はれないで、別の意味に使はれた場合、その用ひ方によって、あるひは“転注”と言ひ、あるひは“仮借”と言ふのである。

■転　注

“転注”とは、「車輪が回転する」といふ意味の“転”と、「川の水が流れて海に注ぐ」といふ意味の“注”とを組合せた言葉で、「その位置が現在の地点から次第に移動して行く」ことを表した言葉である。

「漢字の意味が、本来の意味から次第に変化して行って、元の意味とは異った意味に使はれる」やうになった場合に、これを“転注”といふのである。ただし、異った意味と言っても、“車の轍”のやうに、“川の流れ”のやうに、元の意味と“意味のつながり”がある場合に“転注”と言ふのである。

例へば、“文”といふ字は、すでに述べたやうに“模様”といふのが本来の意味の文字である。ところが、“文字”は“模様”の一種であるといふので、“文字”といふ意味に用ひられる

やうになった。この場合、“文字”といふ意味に用ひられた“文”といふ文字を「これは“転注”である」と言ふのである。

また、“文”といふ字は“文字”といふ意味から、「文字を書き連ねたもの」“文章”や“文書”といふ意味にも使はれるやうになった。これも“転注”と言ふのである。

また、“字”といふ字は、「家に子供が生れる」とか「家族がふえる」といふのが本来の意味の字であるが、今は“文字”といふ意味にしか使はれてゐない。この“文字”といふ意味に使はれてゐる“字”は、やはり“転注”の用法である。

“楽”といふ文字は、太鼓の形(白)を真中に、左右に打楽器を合(木)の上に据ゑた形を表した象形文字であり、“楽器”が本義の字である。

この“楽器”を使って演奏されるものを“音楽”と言ふ。楽器は“物”であるが、音楽は“事”である。だから、“楽器”といふ用法は“象形文字”としての用法であるが、“音楽”といふ場合は、“象形”ではないから“転注”による用法と見るべきである。

さて、音楽を聴くと“楽しい”気分になる。そこで、この音楽の“楽”を“たのしい”といふ意味を表す文字として用ひるやうになった。これも勿論“転注”である。

このやうに、文字が本来の意味に関係のある、然し明らかに別の意味に使はれた場合、これを“転注”と言ふのである。それで、この場合、「“楽”は象形文字であるが、用法は“転注”である」と言ふ。“転注”は造字法の名称ではなくて、用字法の名称なのである。

■仮　借

仮借については、すでに前の章で述べたやうに、「仮に借りる」といふ用字法である。

“転注”も、ある意味では“仮借”と言へないこともない。例へば、“楽しい”といふ意味を表す固有の文字が作れないので、“音楽”の“楽”といふ字を借りて“たのしい”といふ意味を表したのだからである。

然し、これを“転注”と言って“仮借”と区別してゐる訳は、意味につながりがあるからである。“仮借”は、意味に全くつながりが無い。ただ、発音が同じであるか、もしくは似てゐるからといふ事を頼りに借りる用字法である。

チョムスキー以前の西欧の学者たちは、文字は“表意”よりも“表音”が大切だと言ふけれども、“表音”は手段であり、“表意”が目的であることは、“意味”につながりがあるのを“転注”と称し、“発音”につながりがあるのを“仮借”と称してゐることでも知れる。

意味につながりがあれば、「仮の借物」ではなくて“転注”と言ひ、意味につながりが無い時に「仮の借物」だと言ふのである。発音のつながりは、意味のつながりに及ばないことがよく解る。

さて、“仮借”は、ある言葉を表すための固有の文字がどうしても作れない場合に、仮の便法として使はれる用字法のことであるが、字画が複雑な場合に、もっと簡単な同音の文字を仮借する、といふこともあり、また、その逆の場合もある。

例へば、“后”を“後”の意味に用ひるのや、“舎”を“捨”の意味に用ひるのは、私たちにもよく解るけれども、“是”の代りに“誤”といふ字を使ふのや、“欠(缺)”の代りに“闕”といふ字を使ふのは、文章を重厚にするためだとは思ふけれども、私たちにはちょっと理解し難いことである。

また、“伸”の代りに“信”といふ字を用ひるに至っては、私には全く理解できない。この類の仮借が、中国の文章では実に多くある。わが国ではこれを“当て字”と称して、“誤

字”に扱ふところであるが、中国ではこれが堂々とまかり通ってゐるのである。

もっとも、わが国でも、“信子”や“信長”などのやうに、人名では“のぶ”と読んでゐる。これは“同音”のよしみで“伸”の訓を借りたものであり、やはり、仮借の類と見るべきものであらう。

また、“壱・弐・参・伍・拾”なども、“一・二・三・五・十”の仮借である。これは数字を改竄する恐れがある場合、それが出来ないやうに、わざと複雑な漢字を仮借したものであって、これなどはよく解る。

もう一つの仮借は、外国語を(意味に関係なく)発音通りに写す場合である。翻訳できる外国語は翻訳するのが普通であるが、翻訳できないものは仮借するほか方法が無いので仮借する。然し、外国の地名や人名などの固有名詞は、その意味が翻訳できても、仮借によって表現するのが普通である。

“英吉利斯”“仏蘭西”“伊太利”などの表現がこの例である。わが国では、カタカナといふ文字があるので、“イギリス”“フランス”“イタリー”と簡単かつ明瞭に表現できるので有利である。然し、“英国”“米国”とか、“英・独・仏”とかと、略称する場合には、カナよりも漢字を仮借した方が解り易く便利である。(例へば“イ”では解らないが“伊”だと直に“イタリー”と解る)

■字体の変遷

漢字の最も古いものは、亀の甲や牛の骨に刻まれた文字で、これを“甲骨文”もしくは“契文”と呼んだ、といふことはすでに述べた所である。その次に古いものは、金属の器具や石器・石碑などに刻まれた文字で、これを“金石文”と呼ぶ。“金石文”は、装飾的な

意味もあって、古い契文よりも逆に絵画的である。

春秋時代(紀元前七七〇年〜前四〇三年)から戦国時代(前四〇三年〜前二二一年)にかけて、多くの古典が書き著されたが、この時代に用ひられた字体を“籀文(ちうぶん)”、もしくは“大篆(だいてん)”と呼ぶ。

秦の始皇帝が初めて中国全土を統一したので、それまでの各地の様々な字体を統一して“篆書”といふ字体を作ったことは、すでに述べた所である。この“篆書”は、籀文が“大篆”と呼ばれるのに対して“小篆”と呼ばれてもゐる。

秦は僅かに二世で滅びてしまひ、漢帝国(紀元前二〇二年〜紀元八年)の二百年に亙る長い治世が続くのであるが、この時代に用ひられた字体は、今の楷書(かいしょ)体に近い“隷書(れいしょ)”と呼ばれる字体であった。この字体は、後漢(紀元二五年〜二二〇年)の末に“楷書”が現れるまでの中心的字体となった。

後漢の末に、現在用ひられてゐる“楷書”といふ字体が作られるが、紙が発明されて、それまでの“木札”や“竹簡”に代って、比較的手軽に文字が記録できるやうになったことと関係があるのではないかと思はれる。

“楷書”とは、「きちんと整った書体」といふ意味の言葉である。これをやや崩した形の書体を“行書”と言ひ、大いに崩した書体を“草書”と言ふ。これらの書体が書体として確立したのは、五〜六世紀の六朝時代である。

■中国語の特性

中国語の著しい特色の第一は、「一つの音節が、一語としての意味を有ってゐる」といふ所にある。第二は、「音節の数が著しく多い」といふことである。これは、日本語と比較し

てみるとよく解る。

私は「日本語と中国語とは、世界の言語の中で、両極端を占めてゐる」と思ってゐる。それほど、日本語と中国語とは、いろいろな点でひどく違ってゐるのである。

日本語には、単音節の言葉は極めて少ない。“木”“田”“手”“目”“毛”“葉”などがこれであるが、全体の中で占める割合は極めて少ない。それよりも“山”“川”“畑”のやうに、二音節・三音節の言葉の方が多い。

ところが、中国語は、原則的に言へば、すべての言葉が一音節で出来てゐるのである。ただ、一音節では聴き取り難いから、話し言葉では二音節になることがある。これは、日本語でも、“田”を“田んぼ”と言ひ、“目”を“お目目”、“葉”を“葉っぱ”と言ふのと同じやうなものである。

しかし、理由はただそれだけではない。日本語のやうに、音節を組合せて言葉を作れば、音節の数が少なくても、ほとんど無限と言ってもよい程の言葉が作れるが、一音節では、いくら音節の数が多くても言葉はそれだけの数に限られてしまふといふことにもある。

中国語の音節の数は、今の北京語で言へば一千六百四十四種類ある、といふことである。これだけあっても、一音節では一千六百四十語しか収容し切れない。同じ音節の中に別の言葉を押込まざるを得ないわけである。

だから、中国語には“同音異語”が多い。漢字はこれを書き分けてゐるから、目では識別できるが、耳では聴き分けることが出来ない。どうしても、二音節にして異った言葉にせざるを得ないわけである。

例へば、“指”と“紙”とは、同じ発音であるから、耳で聴いたのでは区別できない。そこで、“指”は言葉としては“指頭”と言ひ、“紙”は“紙張”と言って区別してゐるのである。

この点、日本語は、二音節・三音節の言葉が多いから、音節の数は五十音以上いくらも無いが、同音異読は極めて少ない。それでも“かみ”には“神”と“紙”と“上”とがあるなど、決して無いわけではない。

■中国語の欠陥

このやうに、日本語と中国語とを比較してみる時、中国語の特色がはっきり解るのであるが、その特色は今は“長所”といふよりも“欠陥”といふ面が強い。

中国語には、日本語に無い多くの音韻を有ってゐて、その一つ一つが総て明瞭な意味を備へてゐるので、多彩で絢爛である。だから、聴いてゐて文学的な味はひが深く、且、音楽的美しさがある。

しかし、そのやうな意味のある音声が、続いて並べられるといふことになれば、日本語のやうな、言葉と言葉との関係を明らかにするテニヲハや活用変化がない中国語では、正確な思想の伝達が非常に難しくなる。日常よく使はれる言葉だったら解るだらうが、学問的な討論などになると非常に理解し難いだらうと思ふ。

既に述べたやうに、人は言葉で物事を観察したり思考する。だから、中国語で物事を観察し、思考する中国人は文学や思想の面では多彩絢爛な言葉で非常に結構だと思ふが、現代の精密な論理を必要とする科学の研究には向いてゐないやうに思はれる。

しかし、言葉の性質は、変へようとして変へられるものではなく、また、変へるべきものではないと思ふから、日本語や英語などを通して研究すればよいと私は思ってゐる。

中国語の特色は、孔子や老子を始め、諸子百家のやうな、大思想家を生むのに適してゐるものだと思ふ。さういふ面でその特色が生かされれば、科学の研究に適しないと

いふ欠陥など、問題にすることは無いのではないかと思ふ。

■漢字の欠陥

中国語の欠陥は、そのまま漢字の欠陥につながる。漢字は、中国語をそのまま視覚に訴へる“視覚言語”であるから、それは当然の事である。

ただ、“聴覚言語”のやうに、即座に受取れなくても、“視覚言語”の漢字は、理解できるまで待ってゐてくれるので、理解し難いといふ欠陥はやや緩和されるのではないだらうか。

然し、格変化も活用もテニヲハも無い漢字が長く並べられてあると、いろいろな解釈が出来て、正確な理解が困難であることは、我々は昔から中国の古典の研究でいやといふほど味はって来てゐる所である。

もう一つ、漢字には大きな欠陥がある。それは、発音記号を創作しなかった事である。そのため、難しい漢字の発音を示すのに、それと同じ発音の易しい漢字によってこれを示すか、もしくは“半切（はんせつ）”といふ方法によってこれを示さなければならなかった。これが、漢字の学習を困難にし、そのため、長い間、多くの民衆を文盲にしてゐたのである。

例へば、「謙、読為慊」とか「閒、音閑」とかとあるが、これは「謙は慊と同じ読み方をする」といふ説明であり、「閒の発音は閑と同じである」といふ説明である。しかし、この説明では、“慊”や“閑”の発育が解らない者にとっては全く解らないことになる。

「胖、歩丹反」とか「忿、弗粉反」とかとあるのが“反切”である。これは「胖は、歩の頭韻“h”と、丹の脚韻“an”とを合せた“han”といふ音であること」「忿は、弗の頭韻“h”と、粉の脚韻“un”とを合せた“hun”といふ発音であること」を表したものである。

これも、やはり、“歩・丹”“弗・粉”といふ字の発音が解ってゐて、初めて解ることであって、反切に用ひられる漢字の発音が解らなかったらどうにもならない。ところが、その漢字が、無数と言ってもよいほど沢山あるのだから大変である。

我が国では、音節の数が少なかったので、“万葉仮名”から“平がな”や“片カナ”といふ簡単な字体を発明する事が出来た。それで、難しい漢字のわきにカナを振っておけば、子供でも容易に読むことが出来たので、早くから教育が開け、学問が進んだのである。

しかし、中国では、音節の数がひどく多かったので、我が国のカナのやうな音声符号が考案されず、従って、文字の学習が困難で、そのため、国民の大半が文盲である、といふ状態に陥ったのである。

■発音符号

十六世紀頃から、キリスト教の宣教師が布教のために東洋に進出して来たので、彼らの文字は数が少ないこと、その文字は意味を有たず、単に発音を示すことなどに気付き、自分たちも発音符号を有ちたいと願ったに違ひないと思ふ。

我が国でも、徳川綱吉に登用された新井白石は、オランダの書物に接し、「煩雑な漢字を廃して簡便なローマ字を採用した方がよい」といふ意見を述べてゐるほどであるから、中国でも、さういふ人は少なからずゐたに違ひない。

宣教師たちは、布教のために、漢字を学ぶ必要があって、漢字とローマ字とを対照させた学習書を作ってゐる。これらの学習書は、中国人を驚かせると同時に、かういふ発音符号を自ら作らなければならない、といふ気持を起させたに違ひない。

しかし、中国人の手によって実際にそれが作られるやうになったのは、もう二十世紀近くになってからである。蘆戇章が、一八九二年、ローマ字にヒントを得て、“中国第一快切音新字”といふものを作ったのがその初めである。

その後、王照の“官話合声字母”、これに手を加へた、労乃宣の“増訂合声簡字譜”などが作られるが、何としても広い中国の事であるから、ある地方の発音を中心にすれば、他の地方からは批判が出るのは避けられない事であった。

一九一二年、清国政府が倒れ、中華民国政府が誕生すると、中央で、漢字の発音を示すための符号を作る案を決議した。かうして作られたのが“注音字母”である。その後、数次にわたり改訂されたが、今では、中華民国台湾省でこれが使用されてゐる。

■ラテン化運動

我が国でも、明治時代、漢字を廃止してローマ字を採用しないと、西欧の文化を吸収する事が出来ないし、追ひ付くことが出来ない、といふ意見があったが、西欧の強い圧迫を受けてゐた中国では、その意見が一層強かったのは当然であらう。

「中国が二十世紀の世界に生き残るためには、儒学を廃し、道教を滅すことが絶対に必要であり、そのためには、漢字を廃止することが先決問題である」といふやうな意見が盛んに唱へられた。

確かに、中国の漢字は、発音符号が無い上に、発音が地方によって実に様々である。だから、学習し難いことはよく解る。とは言へ漢字を憎んで、三千年にわたる文化を否定する、といふのは明らかに行き過ぎであらう。

ところが、日華事変を契機に、「民族意識を高揚させるためには、文盲を絶滅させ、教育を普及することが何よりも必要である」と考へられ、ラテン化運動が各地に起り、盛んに研究されるやうになった。

中でも、最も熱心だったのは、毛沢東の根拠地である延安であった。ラテン化新文字を普及することにより、文盲を一掃しようと考へたのである。しかし、この運動は、熱心に且、強力に実践されたが、数年で“識字運動”に切り替へられる事になった。

“識字運動”とは、ラテン化運動が盛んになる以前に、「一千字の漢字習得を目標とする運動」として進められてゐたものである。指導者たちの意図に反して、農民たちは、易しいラテン化文字よりも難しくても漢字を学習したかったのである。

毛沢東に限らず、指導者といふものは、とかく大衆を見縊って過ちを犯すことが多い。ラテン化運動を識字運動に切り替へたのは正しかったけれども、その漢字は、正漢字は難しからうといふ事で“簡体文字”を与へたのである。今、大陸の中国では、この簡体字を学習させられてゐるが、大衆は果してこの文字を学びたがってゐるのであらうか。それとも、伝統的な正漢字を学びたがってゐるのであらうか。

■西欧の文字観

西欧の人々は、長い間、表音文字だけを用ひて来たから、「文字とはすべてかういふものだ」と思ひ込んでゐるらしい。だから、“本当の文字”である漢字を見ると、それが逆に異常な文字に見えるものらしいからおもしろいものだと思ふ。

ローマ字の二十六字に対して、漢字は何千字とある。桁が二桁も違ふのである。だから、“悪魔の文字”と見えるのも無理はないと思ふ。しかし、既に述べて来たやうに、文

字は「言葉を直接表現できるもの」が本当の文字であって、表音文字は仮の借物なのである。

ところが、西欧の学者たちは、この事実に目を覆って、表音文字こそ進歩した文字であると言ひ張って来た。学者なら、この事実が解らないはずはないと思ふ。ただ、自分たちの使用してゐる文字が、価値の低いものだとは思ひたくない、ただそれだけの気持から、何とか理窟をつけて自分で自分を欺いてゐるのであらう。

良くても悪くても、伝統のある言葉や文字は変へてはならないものである。自分の親がどんなに悪い親であっても、親を変へることが出来ないやうに、言葉や文字は言はば自分を育ててくれた親であるから、否定することは出来ないものなのである。

だから、自分の親の短所を見ようとはしないで、極力長所を見付け出してこれを誇りに思はうとする、西欧の学者たちの態度は、事実として明らかに誤ってゐるけれども決して責めることは出来ないと思ふ。

問題なのは、西欧の学者の主張につられて、理想的な文字を使ってゐるのにも関はらず、それを時代遅れの文字だと思ひ込み、この文字を棄てない限り、国際競争に負けてしまふ、と簡単に考へ込んでしまった我が国や中国の学者たちの態度の方である。

■漢字の運命

昭和二十七年に刊行され、長期にわたって読まれた本に岩波新書『漢字の運命』がある。当時、東大文学部の教授であった倉石武四郎博士が、大学で行った講義を骨組みに一冊にまとめたといふ本ださうであるが、私の手元にあるのは四十七年発行の第十七刷のものであるから、二十年といふ長きに亘ってほんとに多く読まれたものだと思ふ。

五章に分れてゐて、その最後の章が書名と同じ“漢字の運命”となってゐる。ここには、日中両国の国語国字問題の歴史がかなり精しく述べられてゐるが、それは、「近代化に重大な障害になると認められる漢字を追放しようとする努力の歴史」についてである。

その中には、「漢字は封建社会に養はれ、またそれで培って来た」こと、又「漢字に、近代化国家の文字としての希望を寄せることは難しい」といふことが、繰返して述べられてゐる。

そして、終りに近い所で、中国の現況として、新文字政策が廃棄されたかに見えるが、「私は否と言ひたい」と言ひ、更に、「漢字は中国が近代化するにつれて追放される運命にあることは予言して憚らない」と言ってゐる。

最後に、日本の漢字の運命について、「漢字の性格として、近代化に抵抗し、封建性を擁護するものを含む以上、それは世界史の大勢から言って、遂に亡び去るものと思ばれる」と予言してゐる。

そして、「問題は、それがいつ亡びるか、また、(中国と日本と)どちらが先に亡びるかだけである」とまで言ってゐる。更に、「中国で千辛万苦の末に漢字の追放を完了した時に、日本ではまだ二千に近い漢字を使ってゐる、と言った状態も考へられる」と言ひ、「その時は、本国で追放された亡命文字を、懇切にも保護してやるほど義侠的な国民だといふ評判が立つかも知れない。ただ、その盛事を、現在生きてゐる日本人は誰も見ることが出来ない、といふのはまことに遺憾なことである」と、いかにも皮肉たっぷりな文章でこれを結んでゐる。

■漢字の将来

このやうに倉石博士は「漢字は亡びる運命にある」と予言してゐる。地球だっていつかは亡びるのだから、漢字だって亡びないわけが無い。その意味では私も「漢字は亡びる運命にある」といふ言葉を否定しない。

然し、倉石博士の「漢字が近代化の邪魔になるから亡び去る」といふ意見には真向から反対する。私は倉石博士とは反対に、「漢字は、近代化の邪魔になるどころか、大変な助けになってゐる」ことを確信してゐる。「事実を、よく目を開いて見よ」と私は言ひたい。明治時代における我が国の躍進を見ても、また、戦後における、世界を驚嘆させた大躍進を見ても、「漢字が近代化の障害になるか、助けになるか」明瞭であらう。

日本の発展の原因を“勤勉”に置く意見がある。然し、さうではない事は、我が国において勤勉な者が必ずしも成功したり立派な生活をしてゐない事で解るではないか。

嘗て“水平思考”で評判になったイギリスのノボノ博士は、「二十一世紀は日本の活躍する世紀になるであらう。その理由は、イギリスではせいぜい千の単位でしか読まれてゐない学術専門書が、日本では万、乃至は十万の単位で読まれてゐるからだ」と言ってゐる。

日本の過去の発展も現在の発展も、“勤勉”よりも“読書量”の多いことに在る。その読書量が多いことは、漢字が助けにこそなれ決して障げにならない事の証拠であることは確かであらう。

最近、マサチューセッツ工科大学で、世界中の文字について、どこの国の文字が最も読書効率が高いかを、科学的に比較研究調査したところ、日本の“漢字かな混り文”が最も効率が高いことが明らかにされたといふ。

また、カリフオルニヤ大学で、アメリカの子供たちに英語をローマ字表記のものと一緒に漢字で教へたところ、漢字の方が例外なくよく覚えられたといふ。つまり、“山”と“mountain”とでは“山”の方がアメリカの子供たちにも解り易く覚え易いのである。

また、フィラデルフィヤの人間能力開発研究所では、日本の小・中学校では学習させてゐないやうな漢字でも、アメリカの幼児たちに学習させてゐるが、どんどん覚えるといふことである。

私は、表語文字である漢字だけが本当の文字であると確信してゐるので、漢字が益々その効用を発揮し、欧米人にも利用されるやうになるのではないかと思つてゐる。